

## 29 あの世界

星野博美

私のお盆はすでに終了したが（へんな日本語だ）、多くの人がこれからお盆を迎えると思うので、前回に引き続き、涼しげな話をしたい。

私が勝手に「あの世界」と呼んでいるものがある。その人があの世界にどんなイメージを抱き、どんな存在を恐れるのか、また何を見て幽霊だと思うのか、といった類いのことだ。

最近の子どもがどんな幽霊像を抱いているかはあずかり知らないが、

昭和四〇年代に人格形成された私にとって、スタンダードな幽霊像といえば、髪の高い女性で、白い装束を着て額に三角形の布をつけ、力なく両手を揃えて「うらめしや」と言い、足はなく、ふわふわ宙に浮いている、というもの。出やすい場所といえ、柳の木の下だった。

昭和ははるか遠くなりにはけりとはいえ、この幽霊像は時代遅れも甚だしい。四谷怪談のお岩さんそのものだ。三百年以上も前の、現世に恨みを抱いて死んでいった女性を本気で怖がっていたことになる。あの頃の自分に言ってやりたいものだ。君がお岩さんを殺したわけじゃないから心配するな、と。幽霊像は、時代を経てもなかなかアップデートされないものらしい。

私が「あの世観」と文化の関係に漠然とした興味を抱くようになったのは、香港に住んだことがきっかけだった。

留学時代から十年を隔て、再び香港に住み始めて間もない一九九六年九月のことだ。ひよんなことから香港の写真家たちと人脈ができ、ある晩、彼らの集まりに参加させてもらった。私はその年の初めに出した『華南体感』という写真集を持っていき、自己紹介をかねて彼らに見せた。

ベンという英文名を持つ写真家はとても喜び、「いいね、とってもいい」と言いながら頁を丁寧にめくっていった。するとある頁でピタリと手を止め、本を閉じてしまった。意を決したように再度開く。しかしまた閉じてしまう。

「どうしたの？」と尋ねると、「怖くて見られない」と言うのだった。

彼が指したのは、福建省・福州の、とある廟で撮った一枚だった。

かつて、琉球王朝の使節が明・清へ朝貢に行き、福州にある「琉球館」という、琉球王朝の出先機関のような場所に長く滞在した。そのエリアは、急速に再開発が進む福州の旧市街にあり、小さな川に石造りの眼鏡橋がかかる、なんともいえず雅な空気が流れた場所だった。私が撮影した廟は、琉球館があったとされる場所のすぐ近くにあった。琉球からの使節も、ここに立ち寄ったかもしれない。そんな歴史のロマンに胸を躍らせながら、写真を撮った。

その写真に写っていたのは、体は人間と等身大くらいで、ピンクや赤、みどりといった色とりどりの皮膚の色をした、頭部だけが異様に大きい

十体ほどの人間の像だった。そのバラエティに富んだ色彩と、茶目つ気たっぷりの表情が魅力的に映り、レンズを向けたのだった。

この写真の何が、四十男を怖がらせるのだろうか？

ベンによれば、人が死んであの世へ行く時、冥府の門で待ち受けているのが彼らなのだという。ここで現世に行った行為が裁かれ、評価が高ければ極楽へ招かれ、低ければ地獄へ突き落される。

彼は恐る恐る頁を開き、「やっぱり怖い」と言っつて、また閉じた。

私にとって香港は、細かい価値観は様々に異なれど、生活水準や西洋文化からの毒され方など、他のアジア諸国と比べたら比較的近い文化だと感じられる場所だった。ところが肝心なところで、世界観がこれほど異なっているとは衝撃だった。住み始めて間もない時にそう知らされた

のは、よかったと思っている。

しかしそう学習したあとも、私はとどころで失敗を重ねた。香港の文化に極力敬意を払いたいと思いつながら、なにせ「あの世観」が違いくすぎるので、どうしても脇が甘くなってしまうのだ。

香港では人が亡くなると、現世より良い生活を冥府で送れるように、紙で作った様々な物を燃やす習慣がある。それらの物を「焼衣」、それらを売る店（日本でいえば仏具店のような店舗）を「紙紮舗」という。

焼衣は、香港の生活の変遷を如実に反映する極めて興味深い観察対象だったので、紙紮舗には留学時代からたびたび足を運んだ。

一九八六年当時は、輸入品のP&G製シャンプーやリンス、宝石、家

具付きの家、ベンツ、冥府銀行発行の一億米ドル紙幣（香港ドルではなく、米ドルである点がミソだ。死後の世界も外貨に支配されているところが香港らしい）、そしてその頃、黒社会の人たちが持ち始めたとびきり大きな携帯電話「大哥大」などが主だった。いまでは最新式のiPhoneやiPad、宝石、召使付き豪邸、豪華クルーザーやヨットなどに変わっている。

それらの焼衣は、死者のために用意されるものなので、通常、あまり人目には触れない。ところが私の暮らした深水埗は事情が違った。隣町の大角咀に公営火葬場と斎場があったこともあり、紙紮舗の数が多く、路上に置かれた焼衣の品々と出くわす機会が少なくなかった。

ある晩、通行人でごったがえす地下鉄駅前のちよつとした広場に焼衣

の品々が置かれていて、何枚か写真を撮った。ファインダーから目を外して立ち上がると、さっきまでごったがえしていた界隈から人がいなくなり、私はひとりぼっちになっていた。そして真っ白な衣服を身に着けた、遺族と思われる人たちの一団が新聞スタンドの脇で硬直したように固まり、遠巻きから私を見つめていた。

客観的に見て、殴られても文句は言えない状況だった。香港には写真嫌いの人が多い。それが死者にまつわるものとなれば、なおさら忌避感覚は強くなる。

殴り飛ばされるのを覚悟で、遺族と思われる人たちに向かってお辞儀をし、道路を渡ろうとした。すると彼らは、こちらに向かって怒鳴るところか、まるで私と最大限距離を置くように、一步、一步と後ずさって



いったのだった。

怒っているのではなく、恐れ、そして憐れんでいるのだと思った。

死にまつわるものはすべて、縁起のよくない「衰気」を帯びている。

だからこそ、死者に捧げたあとは燃やさなければならぬのに、おまえはあろうことかそれを写真に撮り、フィルムの中に封じこめた。衰気は、すっかりおまえに伝染してしまった。かわいそうに……。

幸い、そのあと悪いことには見舞われなかった。しかし彼らの脅えた瞳はいまも忘れられない。

私より手痛い失敗をしたのが、香港在住の日本人の友人である。

彼女もまた私と同じく、焼衣を「キツチュでかわいい」と感じた。そ

してお土産にしようといくつか買い求め、成田行きの飛行機に乗りこんだ。

彼女は首尾よく鞆を頭上の棚に入れて席に着いたが、そのフライトはとても混んでいて、続々と香港人乗客が乗りこみ、あつという間に荷物棚が埋まってしまった。なんとか自分の荷物を収めようと、背伸びして棚を整理する乗客たち。その拍子に彼女のバッグが棚から落ち、中の物が床に散乱した。

床に散らばった、死者に捧げる焼衣の数々。縁起が悪い極致のものが、よりによって頭上から落ちてきた。周囲の乗客は凍りついた。一人の香港人女性は「この飛行機は絶対に落ちる！」とパニックに陥り、「こんな席には絶対座れない」と騒ぎだした。通常、決められた座席は変更で

きないはずだが、香港人の客室乗務員はその心情を察し、特別に座席変更を許可した。一件落着して、飛行機は無事に離陸。

「周囲の人たちの目が冷たくて、成田に着陸するまで、本当に針のむしろみたいだった」と友人は話してくれた。

異文化における死の取り扱いには、気をつけたい。死者の持ち物を、生者がみだりに持つてはいけないのである。